

## 集団の学習の中で個別目標を達成させるための授業改善

陸川厚子 東京都立あきる野学園

**要 旨：**作業学習は、作業室内に必要な道具や教材が常設されているため、安定した学習環境のなかで繰り返し学習することが可能である。そうした学習環境は比較的障害の重い生徒や自閉的傾向のある生徒にとって、落ち着いて学習に取り組める大切な条件になっているが、作業種目や活動内容が固定化し、授業の目的が製品の量産に偏ってしまうことがある。そこで本研究では、生徒の実態を明らかにする評価表「作業学習4段階表」を作成し、授業全体の評価と個々の生徒の実態把握を行い、障害特性に配慮した具体的な個別目標を設定し指導を行った。個別目標の達成に向けては、①視覚的な支援を取り入れながら作業環境を整える、②工程分析を行い適切な作業活動を設定する、③個々の実態に応じた指導方法や教材の工夫を行う、などを行った。研究対象は主に知的障害のある中学部2年生の「紙工」の作業学習を取り上げた。

**Key Words：** 作業学習、評価表、個別目標

### I. はじめに（課題と研究の目的）

フリーターやニートなど社会的な問題を背景にして、働くことの大切さを生活年齢に応じた内容で段階的に学ばせる教育が進んでいる。障害のある人にとっても働くことを通して社会参加することは、以下のことなどが期待でき、働くことの大切さは同じである。

- ①働くことを通して成長していく自分自身に満足感を覚えたり、他者の評価に励まされるなどの充実感を得る。
- ②働くことで得た収入による経済的な自立ができる。
- ③仲間と助け合って働くことによる信頼関係の構築や育ち合いの場となる。

そのため作業学習は働くことに直接つながる学習の一つとして、その重要性が再認識されている。

作業学習は国語、数学などの教科と、道徳、特別活動などの領域を「あわせた指導形態」<sup>1)</sup>で、知的障害の特別支援学校では長い歴史がある。作業学習のねらいは「作業学習指導の手引き」<sup>2)</sup>に以下のように示されている。

「将来の進路に直結するものではなく、働く力ないしは生活する力を高めることを意図し、そ

のために必要な一般的な知識、技能及び態度を身に付けさせることにある。」

また、「新たな職業教育の展開 一人一人の自立と社会参加を目指して」<sup>3)</sup>では職業教育や進路指導などと共に、就労に結びつく大切な学習として以下のように述べている。

「生徒の働く意欲や態度を培い、将来の職業生活や社会自立に向け、生活する力を高めることを意図した学習。」

そして、その必須5要素として以下のことを挙げている。

- 「○一定の品質・量・サービスを維持、確保すること
- 繰り返しの作業過程があること
- 作業過程の中で生徒の責任と役割が明確であること
- 手・足・身体を使った動きがあること
- 第3者による評価が得られること（販売、アンケートなど）」

知的障害の特別支援学校では、作業棟や作業室と呼ばれる部屋があり、作業室内には必要な道具や教材が常設されていることが多い。そのため安定した学習環境のなかで繰り返し学習することが可能である。そうした学習環境は比較的障害の重い生徒や自閉的傾向のある生徒にとって、落ち着いて学習に取り組める大切な

条件になっている。また、作業種目は木工、陶芸など製品を作る内容から、清掃や接客など時代のニーズに応じた内容まで多様である。

学習環境が安定していて作業種目やそれに必要な設備も整っている長所がある一方、生徒や時代のニーズに応じて作業種目や製品を頻繁に変えることは、設備を刷新する費用や専門的な知識をもつ教員の確保の面からも難しい。そのため作業種目や活動内容が固定化し、授業の目的が製品の量産に偏ってしまうことがある。製品の完成は、生徒が作業学習の具体的な目標を理解するためには大切である。しかし、一度作業の流れができ分担当が決まると、量産することが目標になり、個別の目標が作業時間の延長や集中力の向上など抽象的で画一的な目標に偏ってしまう危険性がある。

本研究では、生徒の個々の実態把握や障害特性を考慮した具体的な個別目標を設定し、その達成に向けて指導方法や教材を工夫しながら、集団の授業の中でも個々の教育的ニーズに応える授業改善を目指した実践研究である。

なお、本校知的障害部門中学部の作業学習は、学年ごとに目標に応じて作業種目を変えている。

1年 農園芸：「運び」など体を大きく使う活動や収穫を通して作業学習の楽しさを知る。

2年 紙工：「紙ちぎり」など手先を使う活動を通して手指の巧緻性を高める。

3年 木工：安全な道具や機械の使い方を身につける。

本研究の対象は、主に知的障害のある中学部2年生10名である。

## II. 方法

作業学習の課題を整理すると表1のようになる。

表1 作業学習の課題

現状	メリット	デメリット (課題)
作業種目や作業室など施設設備が固定化している。	安定した学習環境。繰り返し学習する機会がある。	課題1：個別目標の達成に適した作業分担になるより、製品を量産するための分担になることが多い。
実態把握や個別目標の設定以前に作業分担当が決まり固定化する。	製品完成までの流れができ、安定した学習体制が整う。	課題2：「量産」という集団の目標が最優先になり、実態把握や個別目標の設定が曖昧になる。

## 1. 課題1と課題2の関連

「実態把握に基づいた個別目標の設定」という課題2への対応を行い、個別目標の達成に応じた支援が行われれば、課題1の解決につながる と考える。

## 2. 課題解決の方法

- ①授業全体を整えながら簡便に生徒の実態を明らかにする評価表を創り具体的な個別目標を設定する。
- ②個別目標を達成するために生徒の実態に応じた支援方法や教材開発を行う。

## III. 実践報告

### 1. 評価表(以下「作業学習4段階表」)の作成と活用

#### ①「作業学習4段階表」の作成

作業学習を通して育てたい力を作業態度と作業技能に分けて実態把握をするための内容を挙げた。その内容は、日本発達障害支援システム学会 システム改革・研究開発支援センター「インターネットによる発達障害生活適応支援チェックリスト」などを参考にした。発達レベルは主に知的障害の生徒を対象としているので、言語能力を軸にして4段階とした。表はA3サイズ1枚にまとめ生徒の実態が一目でわかるようにした。しかし内容が多く表も大きい ため活用ににくかったので、内容を精選してA4サイズ1枚にまとめることにした。(表2 「作業学習4段階表」)

#### ②「作業学習4段階表」の活用

授業の流れがおおよそ安定してきた時期に、授業全体の評価を行った。(表2 「作業学習4段階表」)「紙工」を通して育てられる力「紙工で取り組める活動 ①」は、作業態度と作業技能全般に及び、紙工を通して多様な働く力の向上が期待できる。しかし現状の指導内容「現在取り組んでいる活動 ②」を同一の表上

に重なると、重なる部分「紙工と現在が一致①と②」が、「作業時間の終わりまで安定したペースで作業をする」の一つだけである。また、現在授業で指導している活動全般が低いレベルになっていることから、生徒のもっている力を充分発揮させていないなどの課題があると考えられる。

## 2. 個別目標の設定

「②「作業学習4段階表」の活用」で述べたように、本授業が生徒の力を充分発揮させていないという反省に基づき、授業改善を目指して事例検討を行った。生徒全員に対し「作業学習4段階表」を使って実態把握と個別目標の設定を行い、紙工の工程分析を行って個別目標を達成するための作業工程を準備し指導を行った。「表3 生徒の「作業学習4段階表」評価」は、その一事例である。

表2 「作業学習4段階表」：作業学習の内容表

内容	記号(会話)レベル		一語文		協応動作 音声言語なし理解言語あり		感覚・運動
運搬・移動・物の操作	一人で運べないときは協力を頼むことができる。		物を落としたら自分で拾う。		物を決められた場所に置き戻ってくる。物を決められた器に入れる。	物を持ち上げて目的の場所まで運ぶ。	物を「つかむ・はなす」
材料・道具の扱い	道具が壊れたことがわかり報告する。	目的に応じて道具を選び使う。	準備から片付けまで安全に道具を使う。		道具や材料の名前がわかる。	一人で簡単な道具や材料を使う。	身近な材料や道具に触れる。
数概念・マッチング	簡単な加法減法ができる	不足している数を伝える。	数字と材料のマッチング(1~20)。余りの理解。	有無の理解。同数同士での1対1対応。	絵・写真と具体物のマッチング。	具体物同士、色、形のマッチング。	
きまり・手順	簡単な説明文や注意書きを理解して作業ができる。	作業工程表(具体物、絵、写真)を使って作業をする。	上→下、左→右の流れに従って作業をする。		見本に合わせて作業をする。		
遂行力・持続力	作業時間の終わりまで安定したペースで作業をする。		作業の延長(増量)や中断に応じる。		終了(材料がなくなる、タイマーが鳴る)まで作業をする。	活動の終点まで作業をする。	励まされながら最後まで作業をする。
役割・分業・協力	必要に応じて他の工程の応援ができる。	全工程を理解しその中で自分の役割がわかる。	次の工程またはその工程の担当者がわかる。		自分の任された簡単な工程の作業ができる。	支援を受けながら自分の任された工程の作業ができる。	一つの簡単な工程を経験する。
指示の理解	全体に関わることと自分への指示を判別し応じる。	全体指示を理解し応じることができる。	絵や文字などの個別の指示がわかる。		身振りを伴う言葉の指示が分かる。		
質問・報告	簡単な伝言を言うことができる。	自分から質問や依頼などができる。	簡単な質問に答えることができる。		自分なりの方法で終了の報告ができる。		支援を受けながら報告する。
評価の理解	目標に対する自己評価ができ達成できるように努力や工夫をする。		具体的な目標数(量)が達成できたか、できなかったかがわかる。	他者に褒められることを期待して努力する。	他者の簡単な評価(○・×など)がわかる。		褒められると喜ぶ。
	紙工で取り組める活動 ①		現在取り組んでいる活動 ②		紙工と現在が一致 ①と②		

自閉症の生徒の例

<実態>

- ・言葉による指示, 数, 文字, 模倣する力など, 作業に応用できる基礎的知識と, 物や道具の操作などの技能がある.
- ・作業内容は見たり経験して覚えることが多く, 分からないと指示を待っている.
- ・道具を片手で扱うことが多く, 物をよく落とす.

前期は「表3 生徒の「作業学習4段階表」評価」から「実態①」と「現在取り組んでいる活動②」がかけ離れている項目が多く, 生徒のもっている力を十分発揮させていないことが分かる. そこで繰り返し注意を受ける活動の改善も含めて, ①写真の準備表を使って一人で準備を行う, ②物を落とさないように両手で物を持つ, ③道具を使ったら決められた場所に戻す, という3つの個別目標を立てた. (表4 指導

表3 生徒の「作業学習4段階表」評価

内容	記号 (会話レベル)		一語文		協応動作		感覚・運動
運搬・移動・物の操作	一人で運べないときは協力を頼むことができる。		物を落としたり自分で拾う。		物を決められた場所に置き戻ってくる。物を決められた器に入れる。	物を持ち上げて目的の場所まで運ぶ。	物を「つかむ・はなす」
材料・道具の扱い	道具が壊れたことがわかり報告する。	目的に応じて道具を選び使う。	準備から片付けまで安全に道具を使う。		道具や材料の名前がわかる。	一人で簡単な道具や材料を使う。	身近な材料や道具に触れる。
数概念・マッチング	簡単な加法減法ができる	不足している数を伝える。	数字と材料のマッチング (1~20)。余りの理解。	有無の理解。同数同士での1対1対応。	絵・写真と具体物のマッチング。	具体物同士、色、形のマッチング。	
きまり・手順	簡単な説明文や注意書きを理解して作業ができる。	作業工程表 (具体物、絵、写真) を使って作業をする。	上→下、左→右の流れに従って作業をする。		見本に合わせて作業をする。		
遂行力・持続力	作業時間の終わりまで安定したペースで作業をする。		作業の延長 (増量) や中断に応じる。		終了 (材料がなくなる、タイマーが鳴る) まで作業をする。	活動の終点まで作業をする。	励まされながら最後まで作業をする。
役割・分業・協力	必要に応じて他の工程の応援ができる。	全工程を理解しその中で自分の役割がわかる。	次の工程またはその工程の担当者がわかる。		自分の任された簡単な工程の作業ができる。	支援を受けながら自分の任された工程の作業ができる。	一つの簡単な工程を経験する。
指示の理解	全体に関わることと自分への指示を判別し応じる。	全体指示を理解し応じることができる。	絵や文字などの個別の指示がわかる。		身振りを伴う言葉の指示が分かる。		
質問・報告	簡単な伝言を言うことができる。	自分から質問や依頼などができる。	簡単な質問に答えることができる。		自分なりの方法で終了の報告ができる。		支援を受けながら報告する。
評価の理解	目標に対する自己評価ができ達成できるように努力や工夫をする。		具体的な目標数 (量) が達成できたか、できなかったかがわかる。	他者に褒められることを期待して努力する。	他者の簡単な評価 (○・×など) がわかる。		褒められると喜ぶ。
	実態①		現在取り組んでいる活動②			実態と現状が一致①と②	

表4 指導内容と結果

個別目標	支援方法
① 写真の準備表を使って一人で準備を行う。 ② 物を落とさないように両手で物を持つ。 ③ 道具を使ったら決められた場所に戻す。	① 準備表（写真 上→下）の利用。 ② 両手で物を運べるように準備表にゴムをつける。 ③ 道具を置く場所を写真で示し、決められた場所に戻させる。
<b>結果</b>	
<p>① 文字による説明は単語レベルにとどめて指示内容は写真で示すようにし、準備が終わるまで準備表のゴムを手首につけさせ、常に準備表を意識させ分からなくなったら自分で準備表を見て確認させるようにした。その結果、途中で声かけをしなくても行動が連続し一人で準備ができるようになった。</p> <p>② 両手で物を持つ方法はモデルを示して模倣させた。また物を置く位置を決めて印をつけ、そこまで両手で持って運ぶようにさせた。繰り返し練習させることで定着した。</p> <p>③ 毎回使っている道具の片づけは、場所を覚えて一人で片づけることができた。</p> <p>その他：任された作業の全工程が視野に入るように、作業の始点から終点までが一本の流れになるように道具を設置した。そのため一歩通行で移動しながら活動すれば、分担している作業工程が終了するようになり、終点で次の分担の生徒に引き継げるようになった。その結果、指示がなくても分担している作業工程が一人でできるようになり、同じラインでほかの生徒と順番に作業を行うときも、前の生徒が終了すると自分から作業を始めるようになった。</p>	

表5 紙工 「はがき作り」の工程分析（4/24） 生徒名：

	工程	目標
1.	計量（4g）	・指示された量や長さを計る。
2.	ミキサーに紙を入れる	・物を決められた器に入れる。
3.	赤い線までミキサーに水を入れる	・容器の線まで材料を入れる。
4.	ミキサーのスイッチを入れる	・一人で簡単な道具や材料を使う。
5.	1分（砂時計、タイマー）	・一人で簡単な道具や材料を使う。 ・砂時計、タイマーの終了が分かる。
6.	ミキサーのスイッチを切る	・一人で簡単な道具や材料を使う。
7.	ペットボトルにパルプ液を入れる	・物を決められた器に入れる。
8.	流し込みの準備	・見本に合わせて作業をする。 ・作業工程表（具体物、絵、文字など）を使って作業をする。
9.	パルプ液を入れる	・物を決められた器に入れる。
10.	10まで待つ	・数唱ができる。 ・終了が分かる。
11.	網ではさんで板を載せる	・見本に合わせて作業をする。 ・作業工程表（具体物、絵、文字など）を使って作業をする。
12.	10押す	・数唱ができる。 ・終了が分かる。
13.	台ふきではさんで板を載せる	・見本に合わせて作業をする。 ・作業工程表（具体物、絵、文字など）を使って作業をする。
14.	10押す	・数唱ができる。 ・終了が分かる。
15.	アクリル板に貼る	・一人で簡単な道具や材料を使う。
16.	ローラーで5回こする	・一人で簡単な道具や材料を使う。 ・数唱ができる。 ・終了が分かる。

内容と結果) 机上では簡単な読み書き加法減法ができ、モデルを示せば模倣ができる力をもっているが、障害特性などから作業学習の中では応用が難しい。そのため一つ一つ細かい指示が必要で、繰り返しの練習で経験的に学んでいる。そうした各技能が連続せず般化しにくい生徒に対して、次のような指導を行った。(表4 指導内容と結果)

### 3. 作業工程の分析

「作業学習4段階表」の活用と同時に「はがき作り」の工程分析(表5 紙工「はがき作り」の工程分析)を行った。これは紙工全般では多様な技能の学習が可能であるが、現在行われている「はがき作り」ではどのような技能を獲得させることができるのかを確認するためである。さらに生徒一人一人が個別目標を達成できるように、個別目標と具体的な作業活動(作業分担)を対応させるためでもある。工程分析をした結果、「はがき作り」だけでは「正誤表の理解と活用」などの個別目標を達成する活動が準備できないことが分かり、後期は「カレンダー作り」も取り入れることにした。

### 4. 指導事例

「作業学習4段階表」の活用と「はがき作り」の工程分析を行い、後期は「カレンダー作り」も取り入れながら具体的な個別目標を設定し指導を行った。そして目標達成のために、生徒にとって理解しやすい作業環境を整え、支援方法の工夫や教材開発を行った。

#### ①-1 作業環境の調整

<課題>

作業棚や道具入れに写真を貼り生徒にわかりやすく配置してあったが、生徒の自主的な作業準備活動を促すことができず、毎回同じような声かけや援助をしていた。そこで生徒の実態に応じて準備内容を決め、自主的に

カゴについているケースの写真と準備用写真カードを合わせてケースに写真を入れる。



図1 写真カードのマッチング

準備ができるように個別の準備カードを作成し活用した。

<支援方法>

障害の重い生徒は、基礎的な学習で絵や写真、形のマッチング学習をしているが、机上の学習成果が般化できないのが現状である。本研究ではカゴについているケースの写真と準備用写真カードを合わせてケースに写真を入れ、カゴごと持ってくるようにした。(図1 写真カードのマッチング)

<結果>

生徒の実態に応じて、一つの道具準備から5項目程度の内容まで、写真や文字での準備カードを個別に作った。また行動が連続せず指示待ちの生徒には、準備カードにゴムを付けて手首に下げる方法を使い、教員からの指示ではなく準備カードがその役割を代用するように工夫した。その結果生徒が自発的に準備を行うようになった。しかし分担が変わると指示が必要になることがあり、般化するためには多様な般化場面を設定するなど今後も工夫が必要であることが分かった。

#### ①-2 禁止の理解

<課題>

作業室には製品や危険な機械など、壊したり触ってはいけない物も多い。しかし禁止の意味がわからない生徒や、約束を守れない生徒もいる。さらに禁止や注意、否定的な声かけによりパニック状態になる生徒もいる。そこで注意されると泣き叫んで自傷行為を行う生徒に対し、個別目標をたてて指導を行った。

<個別目標>

禁止の表示や声かけに応じ、作業室内の簡単な約束を守って作業を行う。

よく触る物や場所に個別の「禁止表示」を作り掲示する。



図2 禁止表示

<支援方法>

触ってはいけない道具が置いてある棚全体を紙で覆い、よく触る物や場所には個別の「禁止表示」を作り掲示した。(図2 禁止表示)

<結果>

触る回数は減ったが、ボンドなど特定の物は感触遊びの道具として休憩時間に使うようになった。しかし禁止の声かけをしてもパニック状態にならず指示に応じるようになった。

②-1 障害特性に応じた支援方法の工夫1

<課題>

広範性発達障害の生徒。知的障害はないが社会的経験が少なく、新しいことや苦手なことに強い不安を示す。作業学習では、終了時間を繰り返し聞きにくることと、終了時間近くには追い詰められた表情になり頻繁にトイレに行きたがるのが課題になった。時間の概念はある。

<個別目標>

- ①時計係りとして作業時間や休憩時間の終了をみんなに知らせる。
- ②タイマーを使って自分で終了時間を確認し、終了時間まで落ち着いて作業に取り組む。

<支援方法>

終了時間までの作業時間の計算ができるので、「時計係」にしてタイマーを持たせる。自分で作業の終了までの時間をセットしタイマーが鳴ると全員に知らせる係にした。

<結果>

タイマーを使うようになってからは終了時間を聞きに来なくなる。指導をはじめたころは自分でタイマーを見える位置に置いていたが、見えない所に置いたりセットを忘れても時間を気にしなくなり、終了時間まで落ち着いて作業に取り組むようになった。

②-2 障害特性に応じた支援方法の工夫2

<課題>

「②-1 障害特性に応じた支援方法の工夫1」の指導事例と同じ、広範性発達障害の生徒。出来高表を使って自分で適切な目標をたて、自己評価を行い目標を達成できるように工夫や努力をするという個別目標を設定した。しかし「できない」に対する抵抗感が強すぎ、達成できないとうつむいたまま動けなくなってしまう、必ず達成できる極端に低い目標数をたてるようになった。将来仕事の中では外的な条件なども含め、色々な事情で目標に到達できないことがあると予想されるので、達成できない場合の対処方法を学ぶ必要があると考えた。

<個別目標>

出来高表を使って自分で適切な目標数(量)を立て、達成できるように努力する。

<支援方法>

「表6 段階的な指導方法」のように、生徒の反応を評価し指導方法を工夫しながら指導を行った。

<結果>

「達成できない」という表現をやめ、達成までの枚数と達成できなかった理由を書かせた。材料の不足など自分が原因ではないこともあるので、できなかったことにこだわらず、次回はどうしたら良いかという方向に気持ちを向けさせるようにした。「理由」欄があることで、視覚的に考える方向性が明らかになり、自分で書いたことを納得がいくまで繰り返し確認できるので、気持ちの切り替えができるようになった。

③-1 個別目標を達成させる教材の開発1

<課題>

作業技能は徐々に上がってきたが、作業工程の中には生徒が自分で考えたり判断する工程が少なかった。そのため不良品を出して注意されても、何を注意されている

表6 段階的な指導方法

	指導方法
1	作業時間とできあがり枚数を記録させる。
2	目標数を実績の最低数から最高数+10までの値に設定させ、目標数を「達成できた」・「達成できない」の判断をさせる。
3	「達成できない」に○をつけることに抵抗感があったので、達成できなかったときは「あと○枚」と書かせる。
4	「達成できない」の表現を、「目標まで、あと( )枚」という表現に変え、欄外に理由を書かせる。

のか、どうしたら良いのかがわからず、たくさん不良品が出ていた。

#### <個別目標>

検品表に「はい・いいえ」で答えながら規格に沿って自分で正誤の判断をする。

#### <支援方法>

検品箱（図3 検品箱）を使って規格内の製品を見つける。和紙を検品箱の黒い紙上に置き、黒い紙が見える場合（くろ→あり）は規格より小さいのでカレンダー用の箱に入れる。また穴があいていて黒い紙が見える場合は不良品なのでパルプ用の箱に入れる。黒い紙が見えない場合（くろ→なし）ははがき用の箱に入れるように指導した。道具の設定は「図4 検品表」の写真部分のように各箱を並べた。生徒は検品箱を使って黒い紙の有無を判断し、検品表の下部の「あり カレンダー」と「なし はがき」の指示どおりに各箱に入れる。この方法で生徒に規格内のはがきと、カレンダー用の和紙や不良品となるパルプを選び分けさせた。

#### <結果>

和紙の不良品はパルプとして再利用するので、「あな（穴）やしわ」の「ある」「ない」の判断も入れていた。しかし、「あな」はほとんどなく、「しわ」は形が多様で判断できる生徒は一名だけだったので、その作業は最終的な検品時に判断できる生徒の担当にし、検品箱を使った判断は黒の部分の有無だけにした。その結果、小さな黒い部分も見逃さなくなり、ほとんどの生徒は正確に仕分けできるようになった。

#### ④-2 個別目標を達成させる教材の開発2

##### <課題>

「③-1 個別目標を達成させる教材の開発1」の検品箱の利用で、黒い部分が



黒い紙の部分が見えるか見えないかで検品を行う。

図3 検品箱

大きければ自分で有無の判断をして仕分けができるが、黒い部分が小さかったり手元の見えにくい部分にあると見落としてしまう生徒がいた。言葉の説明では理解が難しく何を注意されているのかわからないため、教員からの指示待ちになってしまった。

#### <個別目標>

黒い紙同士のマッチングを通して検品表の「ある・ない」の判断をする。

#### <支援方法>

「黒い部分を探す」という指示の意味を、黒い部分に小さな黒い紙を置くという色のマッチング方法で指導した。（図5 色のマッチング）はじめは黒い部分が大きな和紙で練習をして「色のマッチングをする」という意味を理解させてから、徐々に黒い部分が小さい和紙や、分かりにくい部分にある和紙で練習させた。また、小さなマッチング用の黒い紙を和紙の四辺を一周させながら探す方法も教えた。

黒い紙の有無によりパルプ、カレンダー、はがきに選り分け各箱に入れる。

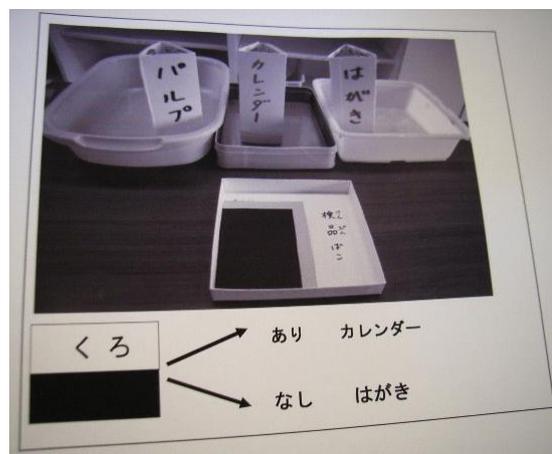


図4 検品表

指さしの黒い部分に小さな黒い紙を置く。



図5 色のマッチング

<結果>

黒い部分を探すという指示の意味が理解でき、小さな黒い紙を自分で移動させながら探すようになった。その後は黒い紙を動かさなくても、全体を見て正しく判断できるようになった。

別の評価を行った結果、個々の生徒の力を十分発揮させていないことが、授業内容のレベルの低さに関連していることがわかった。個々の生徒が力を発揮できない理由は、般化が難しいという障害特性の影響も大きいですが、工程分析を行った結果、個別目標に迫る活動が設定されていないことも原因であった。そこで、次の3点において授業改善を行った。

●  
IV. 考察

「作業学習4段階表」を使って授業全体と個

① 生徒にとって分かりやすい環境作りでは、安定した環境の提供だけでなく、準備カードと片づけの場所の写真表示をマッチングさせるなど、視覚的な教材を使った。それが自

表7 「作業学習4段階表」再評価

内容	記号（会話レベル）		一語文		協応動作		感覚・運動
運搬・移動・物の操作	一人で運べないときは協力を頼むことができる。		物を落としたり自分で拾う。		物を決められた場所に置き戻ってくる。物を決められた器に入れる。	物を持ち上げて目的の場所まで運ぶ。	物を「つかむ・はなす」
材料・道具の扱い	道具が壊れたことがわかり報告する。	目的に応じて道具を選び使う。	準備から片付けまで安全に道具を使う。		道具や材料の名前がわかる。	一人で簡単な道具や材料を使う。	身近な材料や道具に触れる。
数概念・マッチング	簡単な加法減法ができる	不足している数を伝える。	数字と材料のマッチング（1～20）。余りの理解。	有無の理解。同数同士での1対1対応。	絵・写真と具体物のマッチング。	具体物同士、色、形のマッチング。	
きり・手順	簡単な説明文や注意書きを理解して作業ができる。	作業工程表（具体物、絵、写真）を使って作業をする。	上→下、左→右の流れに従って作業をする。		見本に合わせて作業をする。		
遂行力・持続力	作業時間の終わりまで安定したペースで作業をする。		作業の延長（増量）や中断に応じる。		終了（材料がなくなる、タイマーが鳴る）まで作業をする。	活動の終点まで作業をする。	励まされながら最後まで作業をする。
役割・分業・協力	必要に応じて他の工程の応援ができる。	全工程を理解しその中で自分の役割がわかる。	次の工程またはその工程の担当者がわかる。		自分の任された簡単な工程の作業ができる。	支援を受けながら自分の任された工程の作業ができる。	一つの簡単な工程を経験する。
指示の理解	全体に関わることと自分への指示を判別し応じる。	全体指示を理解し応じることができる。	絵や文字などの個別の指示がわかる。		身振りを伴う言葉の指示が分かる。		
質問・報告	簡単な伝言を言うことができる。	自分から質問や依頼などができる。	簡単な質問に答えることができる。		自分なりの方法で終了の報告ができる。		支援を受けながら報告する。
評価の理解	目標に対する自己評価ができ達成できるように努力や工夫をする。		具体的な目標数（量）が達成できたか、できなかったかがわかる。	他者に褒められることを期待して努力する。	他者の簡単な評価（○・×など）がわかる。		褒められると喜ぶ。
	紙工で取り組める活動 ①		現在取り組んでいる活動 ②		紙工と現在が一致 ①と②		

発的な作業活動に結びつく手がかりになった。また安全に作業ができるように「禁止の理解」に対する指導も行った。こうした作業環境への工夫や指導は、将来の働く場でも必要となってくる大切な内容だと考えている。

② 個別課題の設定と指導方法や教材の工夫では、「作業学習4段階表」を使って生徒の実態把握を基盤にして個別目標や指導計画をたてて指導を行った。その際、生徒の実態や障害特性など、背景にある要因にも配慮した。それにより生徒に合わせて教材を工夫することができ、丁寧に評価しながら段階的に指導をすることができた。こうしたことが個別目標の達成につながったと考える。作業学習は長い歴史があるので、「作業学習4段階表」意外にも教育現場にはさまざまな評価表がある。より良い評価表は必要であるが、本研究は評価表の完成が目的ではないので、利用しながら改善していきたいと考えている。

③ 自己評価や自己判断など生徒自ら考える場面の設定では、出来高表や検品表などを使う作業活動を意図的に取り入れた。また、作業分担を決める時も生徒の希望を聞くなど自己選択の場面も設けた。その時に音声言語がない生徒には写真などを使って自分の希望を伝えられるようにした。生徒自身の希望をきくことにより、より積極的に作業学習に取り組む姿勢をつくることができた。また現状では難しいと教員が考えていた課題にも、生徒自身からやりたいという希望がでてく

ることもあった。その場合は本来の作業工程のねらいを絞ったり、個別目標を再検討し、生徒に合わせて教材を工夫した。

以上のように、工程分析、実態把握、具体的な個別目標の設定、個別目標の達成に必要な作業活動の設定、支援方法や教材の工夫を積み重ねることで、集団の授業の中でも個々の教育的ニーズに応える授業が可能であることが明らかになった。さらに個々の教育的ニーズに応える取り組み後、「作業学習4段階表」を使って再評価を行った。その結果、「紙工で取り組める活動①」と「現在取り組んでいる活動②」の差が全体的に縮まり、「紙工と現在が一致①と②」の項目が増えるなど、授業全体の改善につながったことも分かった。(表7「作業学習4段階表」再評価)

## 文 献

- 1) 文部省(1999)：盲学校、聾学校及び養護学校 小学部・中学部学習指導要領,文部省.
- 2) 文部省(1995)：作業学習の手引き(改訂版).4, 文部省.
- 3) 東京都教育委員会(2007)：新たな職業教育の展開～一人一人の自立と社会参加を目指して～. 8-11,東京都.